

# スローライフ

時と生きる

生産性、効率性、合理性を追い求めるあくせくとした生活からの脱出口として提案された「スローライフ」。自分、家族、仲間、自然、これらと向き合って楽しく生きるには、時計の針が刻む時間の尺度とは違ったりリズムを見つめる必要があるようだ。「スローライフ」の実践とは「スローライフ」に人びとが求めるものは、何であろうか。



## 「スローライフ」が展開する日本

横山 廣子

（みやまひろこ） 民族社会研究部

先日、駅前のファーストフード店に飛び込んだ。急いで食べていると、トレイ・シートが目に付いた。「ファーストフード」。そのおいしさや安心はスローライフについています。つい「こ」まで来たか、という感じがした。最近、新聞や雑誌の記事、あるいはキャッチコピーに「スロー」が頻りに登場するようになってはいたが、日本のスローあるいはスローライフの流行は、スローフード運動に由来するとよくいわれる。それは八六年にマクドナルド一号店がローマに出現したのを機に北イタリアの小都市から起り、世界各地に広がっている。そういう意味では日本の「スローライフ」はグローバルな動きと連動するものと考えられる。しかし、欧米の友人たちに聞いてみると、「スローフード」は耳にするが、「スローライフ」という言葉がとくに流行しているとは思わないという。前述のグローバルに展開するファーストフード店のキャッチコピーも日本独自のものだ。これはどういうことか。

巷の「スローライフ」が気になり始めたのは二〇〇一年後半に入ってからのことだ。日本の新聞・雑誌にその言葉が最初に出たのは多分二〇〇〇年。その前年ごろから日本でもスローフードの組織的活動が目立つようになっていた。スローフード運動を日本語で紹介した人びとは当初からその運動の本質が食物のみならず、暮らし方や人びとの関係性全般に関わるものだとならえ、それをスローライフと表現した。五大全国紙と地方紙一四紙でみると、「スローライフ」に言及した記事は二〇〇一年に六件、二〇〇二年は二七〇件に上り、以後は増加の一途をたどっている。

日本でのスローライフの流行にはスローフードとの繋がりが以外に少なくともいくつかの日本の要因が見てとれる。なにより日本の社会状況がある。パブルが崩壊し、見せかけの発展の空しさを通して見えてきたのは、量的増大や効率の追求とは異なる価値観、加速を続けて



参加者約200人が緑香花火を手に、川沿いに並んで楽しんだ掛川の花火大会、2005年

きた暮らし方全体への見直しだった。それが「スローフード」という時の言葉と出会い、「スローライフ」へと展開した。確か昔も「そんなに急いでどこへ行く」とか「ゆっくり行こうよ」がはやったことがある。しかし右肩上がりが続いていた時と今では状況が違う。それに言葉のイメージもある。「スロー」なフキにしてくれ」とか「中国行きのスロウ・ポート」など、日本語における「スロー」は「はちよう」とセクシーだったり、バタ臭かったり、日常を少し離れた新しさを表す。仕掛け人もいた。たとえば元朝日新聞解説委員で、現NPO法人スローライフジャパン理事長の川島正英氏。二〇〇一年七月のユースウイーク誌にアメリカ的価値観や方式に対抗するヨーロッパの「スローライフ」の記事を掲載されたこと、筑紫哲也氏らと「ゆっくり、ゆったり、ゆたかに」を目指すスローライフを広めよう」と決意する。マスコミや地域イベントでのスローライフの流行にはそういう人びとの影響が少なからずあった。そういう中で静岡県掛川市の場合、きっかけは仕掛け人がつづつと言え、土地に内在した諸条件が絡んで非常に興味深い発展を見せている。二〇〇一年秋、七選目のキャッチフレーズを求めた樺村純一掛川市前市長がブレインの一人、川島氏に相談をし、選んだのが「スローライフ」。そもそも樺村市政では、期日から生涯学習が柱のひとつだった。人口一〇万未満、大都市への若者の流出が進む地方小都市の市長は、学校教育以外に、地域の歴史や文化を生涯学習び続けていける場をもつことが、自分のいる場所を肯定的に生きることにつながることを考えた。同市の生涯学習宣言（七九年）は、「人間の内面の成長・成熟（幸せ・生き甲斐）は、一歩一歩、一日一日の学習・努力でしかえられない。自動車のように一足とびには達成できない。お金と学歴と単なる便利さを克服し、無上の幸せと悟りに達するために」。スローライフはこの理念に共鳴している。スローライフを掲げた前市長は七選を果たし、翌年、国土交通省からやって来た新任の小松正明助役を中心に具体化が進められた。二月をスローライフ月間とし、市や実行委員会企画のイベントのほか、市から最大で五〇万円の補助金を出すとすることで、市民主体のイベントを募集することになった。四〇組以上の応募に対して面接審査を実施。予算を

# 時計のリズム 自然のリズム

飯田 卓 いいたたく 民族文化研究部

南の島。それこそ、日本の都市住民が思い描くスローライフの象徴であろう。日本人の南島イメージの原型はマイクロネシアあたりにあるのかもしれないが、ここでは、わたしがかつてきたマダガスカル島の漁村をとりあげ、「スロー」ライフの実態を述べてみたい。ただし、マダガスカルほど大きい島では都市人口もそれほど多く、日本なみのフェーストライフもめずらしくない。マダガスカル島の人たちすべてがスローライフ実践者であるなどとは、ゆめゆめ考えないでいただきたい。

さて漁村であるが、わたしはここへ来ると、たしかに時間から解放されたように感じる。白い砂浜と強い紫外線が、いかにもビーチリゾートにふさわしいという理由のひとつだろう。また、村には電気がひかれていないため、日本からの電話が仕事をせきたてない、ということもある。しかしなにより、解放感を与える最大の理由は、生活のリズムが時計によって刻まれないことにある。

大幅に削りても、「ではやめます」という組はなく、和菓子づくり、木造建築のついでに学芸会など多数の市民イベントが実現した。掛川のスローライフは、衣食住、産業、移動、教育、加齢においてゆっくりに、伝統と地域の価値を再発見し、自然との調和を重んじるものだという宣言が最後に出された。

かくしてスローライフ月間はめでたく終幕。市側は恒例化を想定せず、次年度の予算にも計上しなかった。それがその後も続いていたのは、市民有志の力によるところが大きい。その中心の一人は、現NPO法人スローライフ掛川の代表理事、井村征司氏である。市の生涯学習講座「とはなにか学舎」の卒業生で、第一回スローライフ月間では学舎の同窓生と「ぼちぼちやる会」を立ち上げ、市民主体イベントの総合案内的サポートもこなしていた。

翌年夏になって井村氏らのよびかけで第二回スローライフ月間実行委員会が発足。前年の市民イベント参加者、街づくり活動に関わってきた建築家、お好みさん会メンバーに加え、助役ら市職員も数名、個人の身分で委員となった。予算ゼロのため、市民イベントにはエントリー料三〇〇〇円を出してもらい、さらにグッズ販売などの工夫をして経費を捻出。まさに手づくりで、苦労は多かったが、参加者は前年以上に満足したという。今度は自分でも蕎麦打ちと古事記を語る会の二つでエントリーした小松助役いわく「おもしろいからやった」。

昨年七月にNPO法人スローライフ掛川が設立され、そこを中心にスローライフ月間を実施。また、国の全国都市再生モデル調査事業に応募し、「スローサイクリングによる地域自立・広域観光振興ソフト施策検討調査」もおこなった。掛川のスローライフは地域おこしでもあり、新しい試みが満載である。

無論、掛川の人みんながスローライフに興味をもっているわけではない、冷たい反応も少なくはない。しかし井村氏ら中心メンバーは、ともかく自分が楽しんで、そして他の人びととつながりがあし、それを発揮し、あくせくせず、よい加減で参加している。それは従来のムラの共同体や会社組織内の人間関係とは少し異なる。

企業戦士だった井村氏は定年前の五六歳のとき、友人に勧められて「とはなにか学舎」に入社した。ここではさまざまな人びとが職業や年齢、地位に関係なくグループ学習やゼミに参加していた。自分の世界が広がり、今までは異なる関係性の休得の契機となったようだ。

掛川の人びとから見えてくるスローライフは、速度の遅速よりも、いのまにか種々に切り刻まれた時間枠にはめ込まれ、加速を促されていた暮らしから身を転じて、周囲の人びとや自然や事物と新しい関係を結び直し、それぞれが生きていくと求めるあり方を求めようとするのではないかと感じた。それが「スローライフ」の流行を超えて社会を変えていく力になっていくことに期待したい。

村の人たちは、時刻を知るために時計を見るのがほとんどない。腕時計は普及しているが、町へくりだす時のおしやれのアイテムとして用いられるのであり、待ち合わせに使われることはまずない。

村人たちが時刻を知るうえで、太陽と月の位置、そして海の干満が重要である。とくに太陽の位置は、時計をもたない人に対して時刻を教えるのにも役立つ。たとえば、過去のできごとについて話し合っている人たちが事件の刻限を厳密にするときは、「太陽があつたりに来たころ」と言いながら、空の一方を指し示すことが普通である。「午後何時ごろに」などと補足することはあまりない。

海に出て漁をする時刻に関しては、潮の干満から判断するほうが直接的で便利である。ふつう、漁に適した時刻は干潮か満潮の時刻であることが多いが、いずれも日によって異なるため、干満のようすを観察しながら出漁の頃合を見



カヌー工房。海に面しているので、潮の動きを眺める漁師たちの社交場にもなる



出漁の準備。刺網をカヌーに積み込む

計らう。月夜の漁に際しては、月の位置が出漁のタイミングを判断する材料となる。潮の干満と月の動きは同調しているからである。いずれにせよ、「何時になったら漁に出る」と漁師が言う状況というのは、なかなか想像しにくい。

時間による束縛がこの村であまり感じられないのは、太陽の位置や海の干満によって示される時刻が時計ほど厳密でないからだろう。時計が示す厳密な時刻を気にするのは、一部の村人のみである。数年前、村から二キロメートルほど離れた場所に、イタリア人とマダガスカル人の夫婦がホテルを開いた。このホテルに従業員として雇用された数人の村人は、毎日午前六時の出勤を厳密に守っている。わたしがたまに早起きして海辺に立っていると、「今何時か」と尋ねて、海岸沿いを足早に去っていくもつとも、彼らとて、時計を身につけるほど時刻に忠実なわけではないのだが、ここまで読んだ読者は、時計に縁のない暮らしが悠長なものだという印象をもたれたらろう。しかし、話はまだ半分しか終わっていない。わたしの印象では、時計のない暮らしはむしろ、意外な



マダガスカル南西部で広く用いられる帆走カヌー



自転車の旅は今まで知らなかった素晴らしい景色や道端の花の美しさに出会える。掛川スロースタイルサイクリングVol.1, 2005年(掛川市の写真はすべてNPO法人スローライフ掛川提供)



出航の準備をする子ども。操船は父親仕込みで、この年齢になるとほぼ一人前の船乗り

# ブレスの森の一日

## 三浦 敦

みうらあつし 埼玉大学助教授

面であわたらしい。  
そのことは、たとえば旅立ちの際に実感できる。遠方の親戚を訪問する日取りや、遠くの漁場に出漁する日取りなど、村人たちは直前まで決めない。ところが行くと思えば立つと、さっさと海



ブレス地方の風景



朝市で知られるブレス地方の街ルーアン



有名な「ブレスの鶏」を売る人びと。街ルーアンの市にて

「いや、ワインのおいしさっていうのはね、そういう食事をするかによって決まるんだよ。ワインというのは食事に合わせて選ぶもので、それ自体でいい悪いのっていうようなものじゃないんだよ」と、街の朝市にワインを売りに来ていたジョルジさん。彼が売るのは安いワイン。だ

けどどれも、彼が軒農家をめぐり、試飲をしながら買い付けたもの。「今度うちにおいでよ、お昼を一緒に食べようよ」。日差しが強くなる、夏の初めの水曜日。  
というわけで次の週の水曜日、お昼前の二時半、フランス東部のブレス地

方にあるジョルジさんの家を訪ねるとに。ソヌ川の沖積平野で標高の低いブレス地方（標高約二〇〇メートル）は、ジュラ山脈の西麓にあり、コナラを主体とした森がひろがり、下草が繁茂して草いきれがする地域。あちこちに沼が点在し、森のなかにときどき現れるの

は、赤煉瓦の壁と黒い柱、白いレースのカーテンのぞく窓からなる小さな民家。そんな森のなかに、トレーラーハウスを改造して一人で住むジョルジさん。家の前に木のテーブルを出してきて、まずはお決まりの食前酒から。乾杯！ 木々

から漏れる日差しも優しく、ああ今日は気持ちがいい。「朝市っていうのはね、もちろん安いっていうのもあるけどね、みんなおしゃべりをしたくてくるもんなのさ。みんなはそこで家族の話をしているんだ」。ふーん、そうなんだ、どうりであちこちに朝市が立つはずだ。そんな話をしながらジョルジさん、とっておきの赤ワインの栓を抜き、もってきたのはささっとつくった前菜のサラダ。「俺は昔はフランス軍にいて、モロッコで情報操作や心理操作をしていたんだ」。へえ、こんなところにそんな人が住んでいるのか。「ま、やばいことはしなかったけどね」。ふーん。「今は、ジュラの各地の朝市でワインを売って、その合間にブルゴーニュに買い付けに行くんだよ。でも朝市は週に四日しか行かないし、それも午前中だけだからね。午後はこうして家で本を読んだりのんびり過ごしているのさ」。あー、なんて幸せな生活。といながら、二本目のワインとメインディッシュの鶏の丸焼きにスタート。

が二品。食べ終わったころにはもう四時半過ぎ。それからコーヒーと食後酒を飲みながら世間話をし、音楽がかかれば手に手を取ってダンスが始まる。そうこうしているうちに日も暮れるけれど、なんと、八時ごろには「さあ夕食だ」と言つて、スープに前菜のサラダと、簡単なメインディッシュ。なんとという大食漢！コーヒーが終わるころにはもう一〇時半、お腹がはち切れそうになる宴会の一日。もちろん、こんなことがいつもあるわけではないけれど、ワインを飲んで食事をしながらいわいとやるのがみんなの楽しみ。ジュラ出身のユートピア社会主義思想家フーリエは、理想的な未来社会では人は二日に五食とるように言ったけれど、そんなこと言わなくても、ジュラの農民は今でもすでに一日に五食をとっている。ユートピアンたち。

フランスは今では失業率も高く、特に若い人は就職できる保証はない。それはジュラでも同じこと。けれどもこうしたのんびり時間をつぶしてまであくせく働くなんて、馬鹿げているとも思っている。必要なのは働くけれど、それ以上は家族と過ごす時間がとても大事。資本主義を批判してジュラに生まれた社会主義的思想も、実はそんな農民たちの生活から生まれたもの。食べ物だつて時間が大事。このブレス地方の有名な鶏も、畑に放し飼いにされて時間をかけて育てられ、母から娘へ受け継がれ、世代を超えた家族の時間が込められる。二本目のワインの酔いが心地よく体の

隅々にわたるころ、ようやくデザートに。あれ、もう二時半か。コーヒーも終わるとジョルジさん、「じゃ、僕はちょっと昼寝をするね」と、パンツ一枚になつて自分の部屋へ。酔っぱらった私は、車を運転するわけにもいかないので、木陰でやつぱり、うとうと。むんとする草の香りのなか、こうして今日も一日が過ぎていく……。



仲間内でのパーティの準備。これから2時間の昼食会が始まる